法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-12

銭屋金埒と銭

KOBAYASHI, Fumiko / 小林, ふみ子

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
4
(開始ページ / Start Page)
278
(終了ページ / End Page)
264
(発行年 / Year)
2007-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004314

Hosei University Repository

銭屋金埒と銭

法政大学キャリアデザイン学部専任講師
小林　ふみ子

はじめに

銭屋金埒は、鹿都部真顔とともに、数寄屋河岸付近を拠点とした数寄屋連という狂歌集団を率いて活動した、天明狂歌壇の有力狂歌師の一人である。真顔、宿屋飯盛・頭光とともに「狂歌四天王」と称されたことは、天明狂歌の先達、唐衣橘洲が天明狂歌の沿革を記したことでよく知られている『狂歌弄花集』序（寛政九年付）に次のように伝えられている。

> 真顔・飯盛・金埒・光が輩ついでおこり、これを世に狂哥の四天王と称せしも、飯盛はことありて詠をとゞめ、光ははやく黄泉の客となり、金埒は業によりて詠を専とせず、真顔ひとり四方哥垣と名のりて今東都に跋扈し威霊のさかむなる、まことに草鞋大王なり、また一己の豪傑ならずや。[1]

「狂歌四天王」四名のうち、真顔のみが狂歌界でその後勢力を伸張したことを言う記述である。本稿では、金埒がここで狂歌に専念し得なかった理由とされる、その稼業に注目したい。

金埒の稼業とは、「銭屋」の名の通り、銭両替である。その「金埒」もまた銭に関わる狂名で、金埒はその狂歌活動において自らの生業を前面に出して終始「銭屋」として振る舞った。そのことは、狂歌師としてのいわば役作りと、現実世界における作者実体との距離を考えるよい例となろう。[2] 本稿では、天明狂歌壇の主要狂歌師の一人である金埒の伝記研究を基礎としながら、こうした「銭屋」「金埒」という狂名の意味あいをあらためて探り、「銭」と関わりの深い彼の作品を検討することによって、自意識と韜晦の絡みあった狂歌師の自

Hosei University Repository

己表現の問題を考えてみたい。

一　略歴

まず、その略歴をたどっておこう。『江戸方角分』（文政元年成、写）によれば、数寄屋橋外二丁目、両替商大坂屋甚兵衛[3]。この住所は『狂歌艫』（享和三年刊）でも確認できる。ただし、大妻女子大学蔵『蜀山人自筆文書』（紙片記号R[4]）は俗称を大坂屋甚助とする。両替屋とは言え、江戸では四軒に限られていた金銀を扱う本両替屋ではなく、金銀と銭を交換する脇両替屋と考えられる。江戸の両替屋は享保三年に六百名と定められ、うち脇両替屋には、両替業のみでなく、酒や油、紙など日用品の小売りを兼ねる業者も少なくなかったというが[5]、金埒その人の業態がどのようなものであったかはわからない。前掲の橘洲の弁によれば、経営にそれなりに忙しかったのであろう。

金埒は、はじめ「物事明輔」を名のって元木網門下で狂歌活動を開始した。その名が確認できるのは、天明二年四月に三囲稲荷で行われた、団扇合わせなど一連の狂歌会（写本『栗花集』所収）以来のこと。その年には、七月に師元木網の「七夕狂歌並序」に、また大田南畝が十一月頃に当時の狂歌界の人名を多数織り交ぜて綴った『江戸花海老』において、それぞれ言及される。天明三年正月に刊行を見た『狂歌若葉集』『万載狂歌集』両書において、金埒は、『万載集』においてこそ四首の入集にすぎなかったが、『若葉集』では二十首が採られ、前年までには力のある読み手としてすでに認知されていたことが伺えよう。

馬場金埒と改名したのは天明三年夏のことらしい。六月に狂名酒上不埒こと恋川春町が主催した「狂歌なよごしの祓[6]」に、「明輔事イハクアリ　馬場金埒」と記されている。この年四月に開催した宝合会の記録を七月に出版した『狂文宝合記』でも、同様に「物毎明輔改　馬場の金埒」とあり、その箇所と狂文中の「むま馬金埒」という部分に入木の跡がある。改名があわただしく、その情報が広く伝わるのに一定の時間がかかったというような事情が想像されよう。同年十一月の『落栗庵狂歌月並摺』、同年三月の南畝の母の耳順の賀を記念して作られ翌年正月に上梓された狂歌狂文集『老萊子』でも「物事明輔改　馬場金埒」として入集する。

Hosei University Repository

以後、盟友真顔とともに数寄屋連を主導してゆくことは、すでに論じたことと重なるので詳述しないが、[7]天明八年頃、その狂名を「馬場」から「銭屋」に改める。天明八年の数寄屋連の歳旦『狂歌すきや風呂』に「銭屋金埒」を用いたのが最初と思しく、跋文には丸い銭形の書き判も付している。翌天明九改め寛政元年の『狂歌譬喩節』『狂歌いそのしらべ』でも「銭屋金埒」を名のり、この年頃の刊とされている『潮干のつと』を唯一の例外として、[8]以後「馬場」の使用は確認できない。つまり、この「銭屋」という名は、寛政以後多くの狂歌師が狂名と並行して用いた「狂歌堂」「浅草庵」「森羅亭」「六樹園」「花の屋」といった号とは異なるものであって、「馬場金埒」から「銭屋金埒」へ改名したと考える方がよかろう。

この「銭屋金埒」の名と同時に、金埒はいくつかの号を用いていた。まず寛政七、八年頃の使用が認められるのが「日頭庵」である。寛政七年版の伯楽連歳旦『春の色』、同年刊の金埒の編『仙台百首』をはじめ、その他同じ年の数寄屋連の狂歌集『花ぐはし』や『燕都の見図』、また翌年の数寄屋連（この時点で四方連を継承している）歳旦の一つ『日のはじめ』や同年の狂歌集『帰化種』等において、使用が確認できる。翌九年には、物毎秋輔に譲られたらしく、その年の四方連歳旦『よものはる』、また浅草連の歳旦『柳の糸』には「日頭庵秋輔」が見出せる。

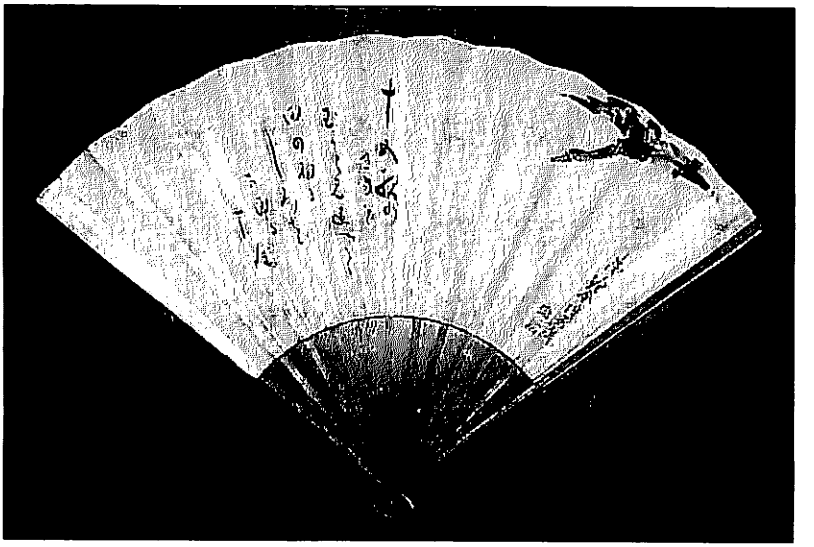
寛政八年秋からは「黒羽二亭」を用いる。通人の黒仕立てに用いられた「黒羽二重」の江戸訛り「黒羽ぶてえ」を掛けた号である。山陽堂『狂歌三十六歌撰』（刊年未詳）には、頭巾から全身黒仕立ての金埒の肖像が描かれていることと併せて、金埒がそういった通人風の装いの似合う風采の人物であったことが想像されようか。寛政八年九月に刊行された金埒と酒月米人の共編『金撰狂歌集』をはじめ、前出『柳の糸』（寛政九年刊）や同九年の烏亭焉馬の咄本『詞葉の花』、同じく翌年の『無事志有意』などにおいて「黒羽二亭金埒」「黒羽二亭」という使用例を見出し得る。この号も、はやくも寛政十一年初には松屋梅彦に譲っていたらしく、『狂歌東来集』初編（寛政十一年刊）に「黒羽二亭梅彦」が認められる。

さらに寛政末頃から金埒はあらたに「滄洲楼」とい

Hosei University Repository

う号を用いる。これは焉馬の「談洲楼」と同じように、寛政期に活躍した立役の一人で、享和元年に没した三代目沢村宗十郎の名から取った号であろう。初期の例では、『狂歌東来集』初編（寛政十一年刊）に「号滄洲老人　銭屋金埒」というかたちも見えるが、寛政十二年版森羅亭『春興帖』[9]に見えるように「滄洲楼」に落ち着いてゆく。享和元年には『狂歌東来集』三編、花江戸住編の歳旦『狂歌江戸春』[10]や山陽堂の『ふもとの夷詞』、文化二年には『東来集』四編や真顔編『雄花集』[11]に「滄洲楼金埒」「滄洲楼銭屋金埒」などと用いている。没する少し前の文化四年九月の酒月米人編『月の都』（外題による、序題「さらしな集」）においても「滄洲楼金埒」の名で一首を寄せている。金埒の没後、同じ米人の編にかかる文化六年刊『四方山』[12]では、十八亭梅戸が「十八亭改滄洲楼梅戸」を名のっているため、この人物が「滄洲楼」号を継承したと考えられよう。

それ以外に、「銭塘金埒」なる号を使用した形跡を指摘しておきたい。三陀羅法師編『狂歌東西集』（寛政十一年刊）に、狂歌の欄は彫り残しとなっているが、この号が見られ、前出の寛政十二年版森羅亭『春興帖』にもこの名で一首が収められている。筆者架蔵の扇面



筆者架蔵金埒扇面「十五夜の月を玉かと見迚へて田の面にしろをかゆる雁金　銭塘金埒画賛」

Hosei University Repository

にも狂歌に絵を添えて「銭塘金埒画賛」という落款を付している【図参照】。前掲大妻女子大学蔵『蜀山人自筆文書』（紙片記号R）（注4）において、用字は異なるが「銭糖金埒」の号で掲出されているのも、この号であろう。中国江南の地名である「銭塘」（現在の杭州）を用いた意図は不明ながら、あるいは商売繁盛を祈願してつくる絵馬の「銭塔」のもじりであろうか。

編著に、次節で論じる『仙台百首』（寛政七年刊）・『金撰狂歌集』（寛政八年刊）があるが、それ以外に『狂歌猿百首』（刊年未詳）を刊行している。堀川百首題を猿にこと寄せて詠んだ百首で、たとえば「桜」「早苗」「述懐」をそれぞれ次のような調子で詠じたさまは微笑ましい。一首目は「都ぞ春の錦なりける」（『古今和歌集』春上）のもじり。

見渡せばくゝり桜に糸ざくら都ぞさるの錦なりける

菅笠に頭かくして早苗とるしりはかくさぬ猿ふとしかれ

なげかじな木から落たる猿すべりすへに寄ては又のぼるべし

花屋久次郎の刊記にも、また真顔、および白猿の狂名を持つ五代目市川団十郎による二つの序のいずれにも年記はないが、寛政十二庚申年正月の刊かと推定される。というのは、真顔の「四方歌垣」号から寛政八年以降の成立であることは動かない。さらに白猿の序に「えほうも申の方」とあることから恵方が申酉の方角となる十干が乙・庚の年に限られ、金埒の文化四年の没までに該当するのは寛政十二年と文化二乙丑年に絞られる。真顔の序が庚申待ちに紙幅を割いていること、前掲白猿序の「えほうも」が思わせぶりなこと、何より猿百首を刊行するのは申年がふさわしいことなどを勘案すれば寛政十二庚申年刊の蓋然性が高い。

なお、南畝の蔵書目の一つ『杏園稗史目録』（写）に狂歌本の一つとして『万葉集』なる書が見え、「金埒」と注記されるが、いかなる書か未詳。南畝とは、真顔とともになかば門人のようになってより関係深く（前掲拙稿注7）、南畝が天明末に狂歌壇と一線を画するようになってからも親交があったらしい。南畝が年始回りで立ち寄る先の一つでもあったことが、南畝の『会計私記』（写）寛政九年の条に伺えるし、享和元年の南畝の大坂出役の出立の時も大森まで出向いて真顔・飯

Hosei University Repository

盛等と宴を催している（『改元紀行』）。享和三年の南畝の日記『細推物理』にも散見する。

没したのは、文化四年十二月十日らしい。現在その墓石は確認できないが、岩瀬文庫蔵の四世絵馬屋額輔『狂歌墓所一覧』（写）芝区の項にこの日付とともに「金杉常瑞寺」と記載される。東京大学総合図書館蔵の『野辺廻夕露』（大正三年成、写）九にも同寺・同日付で法号釈浄清信士として載る。同館蔵林旧竹『墓碣余誌』（明治三十五年序、写）巻八狂歌戯作講話師ノ部には、同じ日付ながら「芝金杉常瑞寺、転麻布古川光林寺」とあり、その墓が移されたことが知られるが、墓碑も写されていず、当時から不明であったか。なお『狂歌人名辞書』他、忌日を十二月四日とする説があるが、墓所の伝聞が常瑞寺、一説に光林寺とあいまいなことから、十日説の方が信憑性が高いか。また諸書に行われる享年五十七歳についても今確認できる資料を持たない。

二　「金埒」の狂名

金埒の、その稼業にちなんだ最初の作は、まだ物事明輔の狂名を用いていた頃に、『狂歌若葉集』巻下に収められた次の一首である。

両替屋暮春

包みから八重山吹の新小判かはせ〳〵に行春の色

包みから取り出された山吹色に輝く新しい小判が為替に供されて銀や銭に替わって行くさまを、堤に咲く八重山吹が川瀬に散りかかり、過ぎ行く春の色を見せることになぞらえるという趣向となっている。

とはいえ、金埒が自らの両替屋という商売を狂歌の上で前面に出したと言えるのは、狂名を「金埒」に改めてからのことである。すでに述べたように、彼は、「イハクアリ」として天明三年夏頃に「馬場金埒」と改名する。この狂名は、漢文の初学書『蒙求』の標題の一つ「太真玉台　武子金埒」の後者を出典とする。『蒙求国字解』（安永七年刊）の訓点にしたがって、漢文の原文部分も書き下しにし、片仮名交じり文で記されたその解釈も併せて、左に掲出してみよう。

晋の王済、字は武子。大原晋陽の人なり。少ふして逸才有り。風姿英爽、気一時に蓋ふ〈割注、気蓋一時トハ己レカオヲ自慢シテ当時一世ノ人己レ

Hosei University Repository

ニ及ブ者ハアルマジトホコリ見下スヲ云〉。弓馬を好む。勇力人に絶す。易及び荘老を善くす。文詞俊茂〈割注、俊茂ハスグレテヨキ句ヲ多ク吐クナリ〉。伎芸人に過ぐ。（中略）性豪侈〈割注、奢侈ハ強クヲゴルヲ云〉。麗服玉食す〈割注、玉食ハ珍味ヲ食フヲ云〉。時に洛京、地、甚だ貴し〈洛京ハ洛陽ノ王城ナリ。地貴ハ屋舗地ノアタイ甚ダ高直ナリ〉。済、地を買て馬埒を為る〈馬埒ハ馬駆場ノ両方ニ垣ヲ結ナリ。俗ニ云ラチナリ〉。銭を編め之に満つ〈言ハ、銭ヲアミ付テラチニ結ナリ〉。時の人、謂て金溝と為〈言ハ王済ガ金銭ノ多キヲ云〉。

『世説新語』汰侈の巻にも同じ逸話が見えるが、日本において近世初期より和刻本が流布した『世説新語補』（明何良俊撰、李卓吾評、王世貞校）には収められていないので、おもにこの『蒙求』によってよく知られた故事であったと考えられる。その要はすなわち、若くして容姿に優れ、かつ文武の才を誇った晋の王済が、豪奢な暮らしのあまり、自ら馬場を造営し、それを囲む埒にまで銭貨を編み込んだというものである。「馬場金埒」という名は、この馬場の埒にまで銭を編み込む行為、またその埒を擬人化した狂名と言え、稼業として取り扱った銭を媒介にして、王済の姿が金埒その人に重ねられる。それは、王済が銭をめぐる逸話の主だからというだけではなく、金満家で、豪放な人物であり、「文詞俊茂」つまり詩文の才にも恵まれていたということも十分に意識した命名であったろう。そうした裕福で豪勢な才子という人物を装うことは、もちろん金埒自身の戯作的な「味噌」「自慢」である。が、「物事のあけすけ」という初名、「趣向を湯水のごとくつかひてしかももとの趣向をはかず」（『仙台百首』二世恋川好町序）、「我まゝにふるまふ事久し」（『金撰狂歌集』酒月米人序）といったその豪快な人柄を表す記述、また黒羽二重を着た通人の姿を想わせる後年の名のり「黒羽二亭」等から窺われる金埒の人となりと、実際、重なり合うところがある。おそらくそういった一致から、この名が案出されたのであろう。なかば、味噌・自慢でありつつも、豪奢な振る舞いで知られた王済の人物像に自らを重ね合わせて、この狂歌師は、「馬場金埒」という名前を名のったのではないだろうか。

さらに言えば、そういった中国の故事を出典とする

Hosei University Repository

こと自体の衒学趣味の香りにも注意しておきたい。たとえそれが初学者も知る『蒙求』に見える逸話だとしても、漢文の古典に由来する名であることには相違ない。草双紙の言葉遊びに由来する「四方赤良（よものあから）」「大根太木（おおねのふとき）」や、宿屋の主人の擬人化「宿屋飯盛」、しかつめらしい顔をいう「鹿都部真顔」、その容姿の特徴そのものを表す「頭光」といった単純な狂名とは位相を異にしている。銭屋は銭屋でも、ただの銭屋ではないと言わんばかりの気概を感じさせるとさえ言ってよいかも知れない。かの改名の「イハク」の内実は知られないが、「物事明輔」という分かりやすい狂名を捨てて、彼があえて選んだのは、こういった漢文の故事に基づく狂名であった。

金埒は、前述のように天明八年頃、さらに「銭屋」金埒を名のるようになる。「銭屋」には、王済はその財に飽かして自家用の馬場の埒に銭をちりばめたのだが、金埒は銭を商うのだから、銭が馬埒に編み込むほどふんだんにあって当たり前だというくらいの意味が込められていようか。この変更の背景には、『蒙求』に基づく「馬場金埒」という命名は、実際、他の狂歌師連中の狂名に較べるとわかりにくいものであったという実情もあるのかも知れない。しかし、銭にまつわる漢籍の故事によって富裕な人物像を表現するのみで、滑稽味の点ではやや遜色のある「馬場金埒」という狂名よりも、「銭」持ちなのは、裕福だからではなく、銭の両替屋だからだという、いわばオチをも含む「銭屋金埒」という号の方が狂名としておもしろいことは事実であろう。

このように金埒は、言ってみれば「銭」を狂名に仕立てて、それに狂歌師としての自己を託した。それは前述の『狂歌数寄屋風呂』跋に付したような、銭をかたどった書き判までも用いたことに象徴的に表れている。

三　銭に託した自己表現

寛政七年九月には、二世恋川好町（前名、淀早牛）[14]の主催で、金埒が判を担当し、銭に寄せて堀川百首題を詠む会が開かれている。その成果は『仙台百首』[15]として刊行された。撰者金埒自身の詠は収められていないが、たとえば、次のような作風である。三首めの「桃栗山人」は烏亭焉馬。

Hosei University Repository

杜若　川井物築

紫の江戸はえぬきのかきつばた銭びらよりもきよきはなびら

三月尽　森羅亭

一文銭をしめる人もゆく春は百をとしたる心地なるらん

七夕　桃栗山人

小袖までおかし申せど七夕にぜにをばなにとかさゝぎのはし

一首めは江戸紫の杜若の花びらを「銭片」と較べる。カキツバタといえば『伊勢物語』が想起されるから、ここには「業平」の音もきかせているのかも知れない。二首め「一文銭をしめる人」とは、青砥藤綱を言うのだろう。一銭でも惜しむのだから、行く春を惜しむ心はさぞかし、という意。三首めは、七夕に「貸し小袖」として小袖は供えても、銭は貸せないの意。「貸さ」(ず)に「鵲」を掛ける。

題名の「仙台」とは、天明四年、仙台藩が、領内限りの流通で五年間という条件のもと幕府より許可されて鋳造した仙台通宝のことを指す。質が悪く値も低い鉄銭で、三年ほどで三十万八千貫文を鋳造して中止されたが、のちには他領でも流通したという。二世恋川好町の序に、集った人々がその場に積んで[16]あった「杉形の銭」にもたれかかったことを「主人おかしきふしなりとして仙台百首とかうぶらす」というから、この題は金埒自らの命名なのであろう。金埒の跋に、その意図を次のように説明する。

夫、有心体の和歌はたかしらべにしてたとはゞ小判にひとしく、きよくみやびかなれども、その意、深遠にしてみなもとうかゞひがたし。わが輩の口ずさむ、わづかに百の無心体は、一銭に宇治の仮橋をわたり、三文にさつまいもを買ふ。その益とする所、黄口の嬰児も智のつくはじめに先これをしる。これおのれが常に初心にしめす銭の目のつけ所なり。

和歌が小判のように雅やかで手の届きにくいものであるのに対して、狂歌は日常使いの銭のように親しみやすく、幼い子でもその徳を知る、と言うのである。さらに、

是しかしながら例の一国通用にして、ひろくしら

Hosei University Repository

しめんとにはあらず。見ん人つたなきをそしる事なかれ。

すなわち、仙台通宝が藩内に限って流通させることを建前としたのと同様に、この作品は広く評価されようとするものではないと謙遜する。つまり金・銀・銭の三貨の中でもっとも下に位置づけられる銭の卑賤さは、卑俗なものであるべき狂歌の主題とするにまさにふさわしい。とりわけ仙台通宝という悪銭の名は、狂歌という文芸のもつ通俗的な性格を表すのにいかにもふさわしいものであったと言うのである。好町と同じく序を寄せた酒月米人は、この点を次のようにやや違った角度から説明する。

そも〳〵鋳銭のひろく通宝なるや、見ぬもろこしの鳥目に桐の葉わけのきはめもいらず、しらぬみこしの雁首もひとさしにつらなりて、翅なくして鳶のものをやとひ、あしなくして駕で飛するなんど、すべてゑびす歌の自在に似たりけり。

晋の魯褒『銭神論』の「翼無くして飛び、足無くして走る」を卑俗化しつつ、鳥目・雁首（煙管の雁首を潰した贋銭）と、鳥の縁語を吹き寄せにして、銭のもつ便利さが狂歌の自在さに似るという。一見、滑稽をねらった詭弁のようだが、金埒の跋の意図と同じく、銭と狂歌に共通する卑賤さを捉えて、それを手軽さ・気楽さという肯定的な角度から捉え返したものと言えよう。このように狂歌と銭という貨幣に共通性を見出したことは、金埒が自らを狂歌師として演出するにあたって、現実の銭両替という生業を強調した理由でもあろう。

同じ寛政七年の春刊行の狂歌集『花ぐはし』の金埒の跋もまた、狂歌師金埒にとっての銭の意味を問う上で見逃せない。真顔ら数寄屋連の仲間とともに多種多様な桜を題に詠んだこの作品の性格を、金埒が次のようにわざわざ桜を金銭にかこつけて述べ、やはり狂歌を銭に譬えるところへ帰結する。

あしたに三文とよぶも花にして、夕に千金とめづるも花なり。三会目の床花、一枚の紙花、その名はおなじ花ながら、立ならびては深山木とみなこのくらひな違ひめあるを、委しう人にしらせんとて、東都におひかる桜のうち、色香すぐれしものをゑらみ我輩の狂歌をそへたり。詞の花三文にも

Hosei University Repository

せよ、此桜木は一刻千金歌仙桜に収めまして三十九じやもの花じやものといづれの人がめでざらめや。朝に一[17]束三文の安値で売りに来る仏花（いわゆる「三文花」）も「花」なら、李白「春夜」詩に「春宵一刻値千金、花に清香有り月に陰有り」と謳われた春の夜の花も花。同様に多額の遊女への馴染み金も、たった一枚の紙花も、「花」は「花」だと言う。花にも違いがあることを言う文章である。「深山木」は『源氏物語』紅葉賀に由来する表現。たしかに花を金銭に換算することは、一見それらの間に差のあることを分かりやすく示しているようだが、多くの江戸の桜のうち「色香すぐれしものをゑら」むというこの作品の場合、その違いとは、差や優劣というよりも多様さであって、金銭の譬喩は適切というよりこじつけに近い。この譬えの強引さもまた戯作的手法であって、おかしみを狙ったものと捉え得る。が、「詞の花三文にもせよ、此桜木は一刻千金歌仙桜に収めまして」云々と締めくくる末尾において、自分たちの狂歌を「三文」ほどの価値とする点は、単なる卑下というだけではなく、前述のような卑賤さを媒とした譬えと言えよう。さらに狂歌、またその主題となった桜をあえて金銭に譬えるこうした趣向は、金銭に託した金埒という狂歌師の存在の主張でもある。金埒は、似た趣向で、盛んに散る桜を気前よく使われる金銭に譬えた、次のような狂歌も詠んでいる。

うづきにさける桜をよめる

有あまる金のみたけのさくら花ひごとぱつぱとちらしたれども

『古今狂歌集』（文化六年刊）巻三[18]

金埒の作品における稼業への言及は、これにとどまらない。この翌寛政八年秋に酒月米人とともに秋を詠む名歌を輯めて刊行した『金撰狂歌集』の題について、共編者米人は次のように述べている。

金埒かつてこがねをひさぐに、わづかにまなじりをめぐらせば好悪をしる事、弥三が馬を相するよりも速し。その業によく堪たるもめでたければ金撰狂歌しふとかうぶらしめて、撰者に四厘の軽目ありとも五メからけのをしからげて、あまねく通用せしめんとなり。[19]

「弥三」は織田信長に仕えた馬の目利き（『書言字考』）。

Hosei University Repository

金埒が、金貨を扱っていたことがあって非常によく目が利いた、そのために「金撰」狂歌集と称する、という。「かつてこがねをひさぐ」が、金埒が、以前本両替屋に奉公していたことがあるという意か、あるいは両替業のことを婉曲に表現しただけなのか、はたまたこの頃までには銭両替の稼業も廃していたということなのか、事情は量りかねる。ここでは書名の説明として銭ではなく金というのだが、やはり両替商という職業に絡めての命名だと言っていることに相違ない。とはいえ、五行説に基づけば秋は金に充たることから、秋の名歌を撰んだこの狂歌集を『金撰狂歌集』と命名したとという意図もあるはずである。そこをあえて無視して、金銭を商う金埒の撰に係るから「金撰狂歌集」だと言いきる点は、金埒という狂歌師が両替屋という職とともに造型されていること、そのこと自体が滑稽と捉えられていることを示していよう。

このように考えると、金埒が烏亭焉馬による咄の会の咄本のうち、二作で銭にまつわる落噺を出していることも偶然ではないように思えてくる。『詞葉の花』（寛政九年刊）には「水茶屋」の題で、水茶屋で茶代を多く取られそうになったので気を付けろと言う男によくよく事情を聞けば、茶碗が気に入って失敬したからだと明かすという一話を出す。『無事志有意』（寛政十年跋刊）の噺は、「りちぎ者」と題する、稼ぎに精を出しながら吝嗇な男徳兵衛を、悪友たちが吉原に連れてゆく一話である。その後半を掲げると、

「コレ徳兵へ。おのしは三十になるまで吉原を見た事はあるまい。せめてけん物にでもあゆみやれ。」「銭さへ出ぬ事ならゆかふ」と連立、大門をはいると女郎の道中。「コレ、あれが女郎か。」「ヲ、サ。モウ見世が出た」と格子先へつれて行見せれば、「うつくしい物だ。一トばん壱両もでるか。」「何さ。あれが弐朱だ。」「うそをいふぜへ。」「うそじやアねへ。酒肴に本膳めしをはら一ツぱいくつて、ねどうぐがにしき、ひぢりめん。アノ女郎を抱て寝て弐朱よ。」「ハテな。それで弐朱とは、弐朱銀はありがたい。内へかへつてだいて寝よふ。」[24]

素見物の約束で出かけた徳兵衛が遊女を見れば、二朱で遊べることを知って心を奪われるかと思いの外、あれだけの遊女が買える二朱銀の価値を改めて見直した

Hosei University Repository

というオチでしめる咄である。これらの話し自体、とりたてて深い意味を持つものではなかろうが、金銭をめぐる人間の行動のおかしさを切り取ることによって、金埒と言えば金銭という、周囲の期待を裏切らない話の披露であったとは言えよう。

以上のように、金埒が、機会を捉えて金銭に絡めた趣向を用いたことは、彼が狂歌師としての自分をどのように演出しようとしたかをよく示している。そもそも『孟子』滕文公上に「為富不仁矣」というように、金銭そのものが、伝統的な価値観の中で、少なくとも建前としては蔑視されてきた。中でも銭は金銀銭三貨のうちでもっとも賤しいものとされた。そうした銭の性質は、和歌に対する狂歌を譬えるのにふさわしく、狂歌師が自らを擬えるのに充分な滑稽さを備えている。そこで金埒は狂歌師「銭屋」として自らを演出し、さかんに銭に言及したのである。そこには、金埒その人の狂歌観の反映がある。それは、寛政期以後、狂歌を和歌の一体と見なしてその価値を高めようとした真顔とは方向性を異にする。その相違が表面化することはなかったようだが、真顔がのちに俳諧歌と狂歌の呼称を改めようとしたことを、泉下の金埒はどのように思ったであろうか。

おわりに

金埒という人は、以上のように狂歌師としての自己を銭に託して表現した。しかしそれは、狂名をはじめとする金埒ひとりの自己表現であっただけではない。二世恋川好町が主催して金埒に批点を仰いだ『仙台百首』に参加した数寄屋連等の仲間たちにしても、金埒の稼業にちなんで『金撰狂歌集』と名付けたと述べた酒月米人にしても、周囲がその演出を喜び、盛り上げた様子が見受けられる。

金埒没後十七回忌にあたる文政六年に、おそらく盟友真顔が金埒の詠を軸め、南畝の題詞に自らの序を付して刊行した『あと仏』[21]の命名も、やはり銭にちなんだものであった。「没後」の意の「後」「跡」の「仏」という語の組み合わせからなるこの書名ではあるが、「阿堵物」の語をきかせていることは確実であろう。『世説新語補』巻十一規箴などで知られた逸話を出典とする語である。すなわち、晋の王衍、字は夷甫が高潔

Hosei University Repository

な人物で、銭という語も口には出さなかった。その妻が試みに寝床の周りに銭をまき散らしておいたところ、朝起床した王衍が下女を呼んで「阿堵物」を退けよ、と言ったという故事である。「阿堵物」とは、これ、それを意味する六朝時代の俗語といい、この話によって銭を指すようになる。この追善集の命名も、本人だけではなく周囲もまた、彼を銭によって表象しようとした例である。

銭両替商、大坂屋甚兵衛を、自らも、また周囲もこぞって狂歌師「銭屋金埒」として戯画化した、この「金埒」という存在は、天明狂歌において、金銭に身を委ねた町人たちの協同の結果作り出されたと言える。金銭を取り扱い、利殖を図ることで、公式には下に見られることになった町人狂歌師連中にとって、漢籍の衣をまとった狂歌師「銭屋」は、銭の卑賤さの中に己を韜晦させた姿でもあり、現実の生活を反映している分、韜晦しきれない自意識の象徴でもあったろう。それは、結果として、天明狂歌史上、町人が町人として、作品上にその存在を表現した例としても特筆してよいのではないだろうか。

【注】

(1) 石川了「『狂歌弄花集』(翻刻・上)」(『大妻女子大学紀要―文系―』二十八号、一九九六)による。

(2) 狂歌師の実体と狂名の距離の問題については下記の拙稿で考察を試みた。「天明狂歌の狂名について」(『国語国文』七十三巻五号、二〇〇四)。

(3) 中野三敏編『江戸方角分』(翻刻、近世風俗研究会、一九七七)。

(4) 石川了「大妻女子大学所蔵『蜀山人自筆文書』について」(『大妻女子大学文学部紀要』二十一号、一九八九)による。この紙片記号Rについては、南畝と成立に関わる馬蘭亭だけでなく、狂歌界の事情に明るくない別人の手が入っていることを石川氏が指摘している。

(5) 『両替年代記関鍵』巻二考証編第二鍵「江戸の両替仲間の特質」。

(6) 当日の春町の口上と参加者一覧が、原本は行方不明ながら、野崎左文によって写され、慶應義塾大学図書館に収蔵されている。

(7) 拙稿「鹿都部真顔と数寄屋連」(『国語と国文学』七十六巻八号、一九九九)、同「落栗庵元木網の天明狂歌」(『近世文芸』七十三号、二〇〇一)。

(8) 金埒が「馬場金埒」で入集する『潮干のつと』には、

Hosei University Repository

ほかにも南畝が「四方赤良」名で狂歌を載せるなど、やや成立が早いかと思わせるところがある。

（9）東京大学教養学部国文学漢文学教室蔵本。

（10）後出の『月の都』とともに慶應義塾大学図書館蔵本が知られる。

（11）茶梅亭文庫蔵本が知られる。

（12）大英博物館・茶梅亭文庫蔵本が知られる。

（13）引用は東京都立中央図書館加賀文庫蔵本による。

（14）ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵の大奉書全紙判摺物に、宗理鰹の図に添えて「はじめ淀早牛といひ、のち恋川好町を名のり、今あらためて後尻焼猿人」という改名を知らせる一枚があり、はじめ真顔が名のったこの狂名が早牛によって継がれたことが知られる。

（15）古く『新群書類従』十（国書刊行会、一九〇八）翻刻があり、伝本としては聖心女子大学附属図書館・仙台市民図書館・ソウル大学校附属図書館および川口元氏の蔵本が知られる。ソウル本は『ソウル大学校所蔵近世文学芸文集』第二巻（勉誠出版、一九九八）に影印が備わる。引用はソウル本による。

（16）その概要は『国史大辞典』などの辞書的な記述によるが、川柳をはじめとする文芸における受容については阿達義雄『川柳江戸貨幣文化』（東洋館、一九四七）に十頁にわたる詳細な記述がある。

（17）国立国会図書館蔵本による。

（18）法政大学市ヶ谷図書館蔵本による。該書は、浅草庵が古歌に門人等の詠を取り混ぜて選んだ撰集で、金埒の一首はおそらく別に初出があるが、今のところ把握し得ていないのでやむを得ずこれを出典としておく。

（19）東京大学総合図書館蔵本による。

（20）『噺本大系』による。この作品は『日本古典文学大系江戸笑話集』（岩波書店、一九六六）に注釈が備わる。

（21）帝京平成大学附属図書館に版本が収蔵されるほか、九州大学文学部図書室富田文庫に写本の存在が知られるのみ。

〔付記〕本稿を為すにあたり、ご教示をいただいた中野真作氏、延広真治先生、石川了氏、後藤憲二氏、塩村耕氏、作品調査に便宜をお図りいただいた各所蔵機関に深謝申し上げます。

本稿は、平成十八年度科学研究費補助金（課題「摺物による江戸狂歌史の再検討」）の成果の一部を生かした研究である。